

## 原 著

# 「最後のフロンティア」進出のストレス要因と求められる支援 —ミャンマーにおける定点調査4年目の報告—

勝田吉彰

関西福祉大学

**要 旨：**従来、日系企業の進出が少なかった場所が経済誌紙に「最後のフロンティア」と囃され、新たな進出先となってゆくとき、その発展段階に応じてどのようなストレス環境の変化があるのか、近年進出著しいミャンマーで定点調査を行っている。本稿では2016-2017年の状況を報告する。ミャンマーの政治経済状況は2016年総選挙によりアウンサンスーチー率いる国民民主連盟(National League for Democracy: NLD)へ政権交代が実現し先進諸国から投資の熱い視線が注がれるなか、経済政策の不慣れもあり踊り場の状況になっているが、進出企業数・在留邦人数ともに増加が続いている。ストレス要因は「交通インフラ」「通信インフラ」と「感染症の存在」が2016年と比べ2017年で減少する一方で「医療インフラ」「ミャンマー人(現地人)」を挙げる割合が増加した。ストレス解消手段は、「インターネット」「国内旅行」「国外旅行」「複数での飲酒」「ひとり酒」「カラオケ」が増加し、経済発展とともに通信環境改善やLCC路線の充実が寄与したものと思われる。また、邦人数の増加とともに交流の機会も増えていることが反映されていると思われた。日本の本社に知ってほしいこと、ミャンマー生活で思うことでは、環境面の記述が多い一方、ミャンマー人に対する感情、同胞に対する厳しい目が目立った。

**キーワード：**最後のフロンティア、海外在留邦人、メンタルヘルス、ミャンマー、海外勤務者

## はじめに

グローバル化のなか日本企業の海外進出は欧米から中国、そしてチャイナ・プラス・ワンの流れにのった東南アジア諸国へと多様化しており、さらに将来の進出有望国としてマスメディアに「最後のフロンティア」と囃される国々がある。これは企業進出が現時点では限定的であるが、進出ブームが起こると目される国である。今後の新たな進出先拡大にあたり、進出の進展や経済発展のステージごとにどのようなストレス要因が発生しどのような支援が必要になるのか知見を集積することは企業支援を通じて日本経済への貢献が期待できる。そのため筆者は2012年よりミャンマーに定期的に赴き現地にて定点調査をおこなっている<sup>1-3)</sup>。本稿では、前報<sup>3,4)</sup>で2015年までの報告を行って以降、2016年から17年にかけての変化を報告する。

## ミャンマーの状況 (2016-2017)

2011年の軍事政権終焉と民主化以来、世界中の注目を集めるミャンマーであるが、2016年の総選挙でアウンサンスーチー率いる国民民主連盟(National League for Democracy: NLD)が躍進、政権交代が実現した。西側諸国からの経済制裁が緩和され投資への期待感がさらに盛り上がった。しかしながら、政権交代に伴う不慣れもあり政府認可に時間がかかり、投資法令の未整備もあり経済発展はいったん踊り場の様相となった。従来外国企業の進出にあたって、外国投資法・不動産譲渡制限法・ミャンマー投資委員会通達・会社法などの既存法制度が実務上の外資規制として複雑にからみあいわかりにくく障壁となっていたが、2016年10月に新投資法、2017年12月に新会社法が制定され投資に関するルールが明瞭化し環境が整いつつあり、今後は投資の伸びが期待される。2015年9月に日本ミャンマー合弁のティラワ経済特区開発プロジェクトとしてティラワ工業団地が開業している。2400ヘクタールの工業団地が開発される計画のうち、先行開業した第1期189ヘクタールはほ

連絡先：勝田吉彰 関西福祉大学  
〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3  
TEL: 0791-46-2525 FAX: 0791-46-2526  
E-mail: katsuda@tkk.att.ne.jp

ほ埋まり第2期の予約も順調、製造業進出の本格的幕開けとなっている。

在留邦人数を図1に、進出企業数の指標となるミャンマー日本商工会議所会員数（単位は会社数）を図2に示す。いずれも右肩上がりの増加を示している。

### 調査方法

前報<sup>3,4)</sup>と同様の方法で、在留邦人対象に調査を継続実施した。調査対象は日本人会員および日本人医療関係者である。日本人会役員の協力を得てミーティングをヤンゴン市内で設定し、その出席者全員にアンケート調査および聞き取り調査を実施した（出席者の回収率100%）。日本人会員は、現地に在住する駐在者本人で家族は含まれない。出席者の選定は日本人会役員に一任した。ミーティングでは最初にアンケート調査を無記名で行い、続いて聞き取りを会食も交えて行い、ざっくばらんな本音を聴取した。日本人医療関係者は現地外国人向け医療機関勤務者および大使館医務官で、同様手順でアンケート調査と聞き取り調査を行った。集計は日本人会員・日本人医療関係者合計して行い、区別していない。n = 27(2016年), n=24(2017年)である。調査項目は ①ミャンマー生活においてストレスを感じる要因 ②ストレス解消方法 ③メンタルヘルス不調の邦人の噂を聞いたことがあるか のほか、自由記入欄を設けて④日本の本社・一般

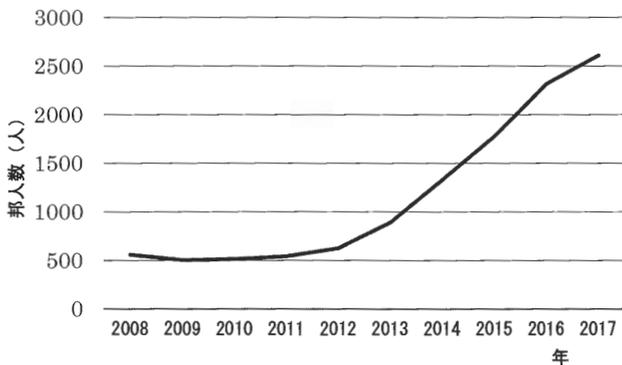


図1 ミャンマー在留邦人数の推移

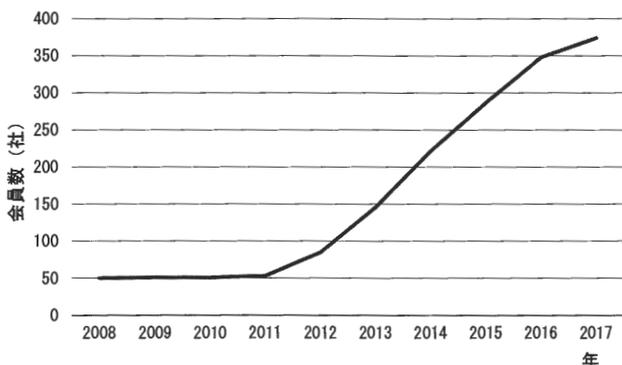


図2 ミャンマー日本商工会議所会員 (社) 数の推移

社会に知ってほしいこと ⑤ミャンマー生活において思うこと について自由なコメントを求めた。アンケート調査の実施にあたっては、関西福祉大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号29-0775）。

企業進出の現状についてはJETRO（独立行政法人日本貿易振興機構）の海外ブリーフィングサービスを利用し、同ヤンゴン事務所にて聞き取りを行った。これは世界約70カ所の海外事務所にて、現地一般経済事情やビジネス環境について、海外駐在員や専門アドバイザーが情報提供を行うもので<sup>6)</sup>、主として海外進出企業関係者の利用が多いが研究者の立場でも申込が受理される。専門資料の提供とともにマンツーマンで1時間の時間が確保され得られる情報も多く有意義である。

### 結果と考察

#### ① ミャンマー生活においてストレスを感じる要因

ミャンマー生活におけるストレス要因を図3に示す。ストレス要因としてインフラ関連が多い点は両年で変わらないが、その中で「交通インフラ」「通信インフラ」と「感染症の存在」が2016年に比べて2017年で減少した。交通インフラについては、交差点の高架化が相次いで完成したりバス路線の再編等の施策によって渋滞が部分的にも改善したことが理由と考えられるが、公共交通機関の改善は道半ばの感があり、今後さらなる改善を期待したい。通信環境、インターネット環境が徐々に改善しつつあるのもストレス感の軽減に資すると思われるが、これも他の東南アジア諸国と比べてもなお遜色があるので、今後の発展によりさらなる改善が期待できるものと思われる。一方、「医療インフラ」をストレス要因に挙げる割合が増加した。医療インフラについては、Victoria病院で2015年より提携医療機関の日本人医師による診療が始まり、さらに日本人歯科医の新規開業など邦人が受けられる医療についても発展がみられているものの、駐在者の裾野が広がるにつれ、海外生活をこれまで経験していない層も増え、その帯同家族も含め、不安な思いを抱く邦人も増加していることが感じられる。上記診療も外来に限られ、入院では日本語の通じる病床はまだ存在せず、バンコクへの緊急移送で対応している。また、「ミャンマー人」をストレス要因として選択する割合が増加したが、これは後述の④⑤で考察する。

#### ② ストレス解消方法

複数選択可で問うたストレス解消手段を図4に示すが、各項目とも全体的に2016年から2017年にかけて増加しており、解消手段の多様化がうかがえた。特に「インターネット」「国外旅行」「国内旅行」「複数での飲酒」の増加が目立った。インターネットは調査開始当初は選

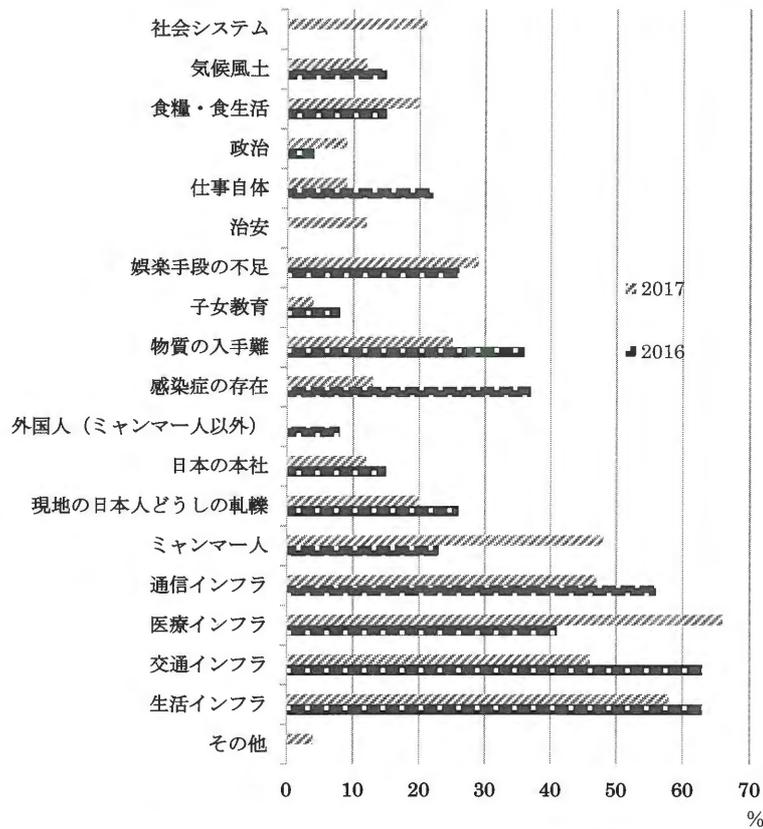


図3 ミャンマー生活においてストレスを感じる要因

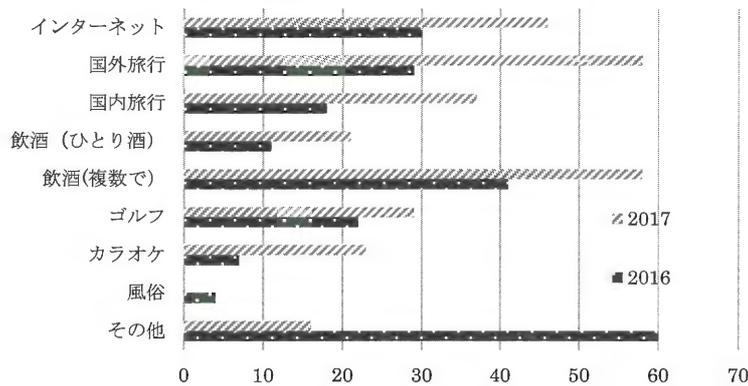


図4 ストレス解消手段

択される割合が高く、娯楽が無いなかインターネットに依存している様子がうかがえたが、その後、いったん減少していた。2016年から2017年にかけて再び増加、これは接続環境が改善し、かつてのように極端に遅く途中で何度も途切れることがなく快適に使えるようになったためと思われる。国外旅行・国内旅行とも増加しているのは、相次ぐLCC就航による航空路の充実やヤンゴン国際空港の新ターミナル増設などにより、より低廉かつ手軽に旅行が可能になったためと思われる。インターネット環境改善ともども経済発展の恩恵を受けたものである。飲酒はひとり酒・複数での飲酒ともに増加したものの、複数での飲酒が増加幅が大きかった。これは邦人数の増加とともに県人会・複数の主要大学同窓会ミャン

マー支部・草野球チームなどサークルが自然発生的に形成され日本語情報誌に一覧が掲載される<sup>7)</sup>など、邦人数の増加を背景に職場以外での人間関係ができやすくなったことも原因として考えられる。

### ③ メンタル不調発生状況の推測

在留邦人のメンタル不調者について正確なデータを得ることは、現地に日本語で受診可能な精神科医療機関が存在せず帰国しての受診が多くを占める状況では現実的に困難である。そこで、「メンタル疾患に罹患した邦人の噂を聞いたことがあるか？」との設問に対し「ある」とした割合を継続的に観察することとした。これは海外生活のなかで国をとわず普遍的に観察される「海外の現地日本人社会の中で噂は極めて速く拡散する」という事

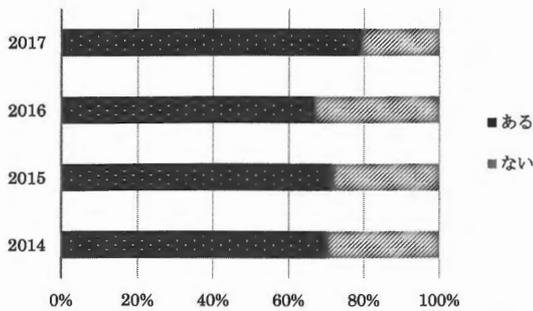


図5 メンタル不調の邦人の噂を聞いたことがある割合

象を利用したものである。稲村<sup>8)</sup>は、海外在留邦人社会において、邦人間で攻撃性を向け噂で批判する傾向を報告し、駐在員妻の立場から噂の速さを実体験から発信するサイトも複数存在する<sup>9-11)</sup>。

結果、「聞いたことがある」とする回答は2016年・2017年とも60%前後と前報までと同様の数字となり、メンタル不調者の発生状況には大きな変化はないと推測した(図5)。

④ 日本の本社・一般社会に知ってほしいこと

「日本の本社・一般社会に知ってほしいこと」の問いに対して自由記入されたものを図6に示す。環境面について、2016年では住宅・医療面でのインフラ不足など、国内で報じられず、かつ、日本の常識で想像しにくいこ

とが記され、2017年でも「生活環境のハードシッはまだまだ良くなっていない」と、日本の報道ではミャンマーの政治体制刷新や経済発展がさかんに取り上げられ、あたかも生活環境がめざましく改善しているかの如きイメージを日本の本社側の人間が持っている節があるが、実際にはインフラ面をはじめ苦勞は多い点を指摘し、生活環境に関する本社の認識と現地の現実との齟齬を訴えているものが見られた。感染症の存在と同伴家族のリスクなど、企業総務の目に付きにくいことも指摘された。ビジネス・文化面では、「決めたことが守られない」「日本とミャンマーは違うことを認識してほしい」「日本では絶対に起こらないストレス要因がある」「業務指示が伝わらない」といった、現地人から受けるストレスについての記述が多く、2016・17年で変わりはない。日本とは異なる国民性・行動様式について派遣する側も積極的な情報収集・学習が求められる。また、「報道されているほど日本企業の経済進出はすすんでいない」「政治問題も大切ですが、ミャンマーの生活習慣も～」と、報道に対する違和感と、ひいてはそれに基づく本社側理解への要望も強く見られた。

⑤ ミャンマー生活において思うこと

「ミャンマー生活について思うこと」の問いに対して自由記入されたものを図7に示す。

ビジネス面 <2016年>	環境面 <2016年>
<ul style="list-style-type: none"> <li>●決めた事が守られない。日本の商慣習が通用しない。</li> <li>●日本側の責任者が駐在していない場合、日本側が現地パートナーをコントロールすることの難しさ</li> <li>●報道されているほど、日本企業の進出は進んでいない。</li> <li>●マナーの向上。日本の本社は長期的計画をもってほしい。</li> <li>●日本で当たり前でないことが沢山ある。ミャンマーでは日本では絶対に起こらないようなストレス要因があります。</li> <li>●政治問題も大事ですが、ミャンマーの生活習慣やミャンマー人の気質を知ってほしいと思う。</li> <li>●日本とミャンマーは違う、同じ、もしくは違うということ認識してほしい。そして、できない=劣っていると考えるのは違うと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●生活環境・交通状況・職場。上司は全く知らないの知るところからスタートしてほしい。</li> <li>●余暇にすることがない。</li> <li>●医療インフラの低さも知ってほしいです。</li> <li>●停電・水漏れなどローカルアパートではインフラが不足。サービスアパートに住めるだけの住宅手当希望。</li> <li>●意外に治安が悪いです。</li> <li>●他のASEAN諸国よりも生活しにくい現状(とりわけ住居費etc)</li> <li>●タクシーに危険があるため、車手配をしてほしい。家賃を2000USD以上払えなければ衛生や安全を確保できない。物価は安い、安全・健康を確保するためには日本と同等額の生活費がかかる(食費、日用品)</li> </ul>
<2017年>	<2017年>
<ul style="list-style-type: none"> <li>●業務指示が伝わらない。</li> <li>●ミャンマー人の気質、国特有の事情により仕事が遅れる</li> <li>●仕事が進むスピードが極めて遅いです。</li> <li>●大丈夫がOKという言葉でとらえてほしくない。</li> <li>●ミャンマーの突然の出来事はあたりまえ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●生活環境のハードシッはいまだに良くなっていないこと。</li> <li>●電気・水道環境の未整備</li> <li>●物資の入手難</li> <li>●ミャンマーのインフレで物価は相当高い。</li> <li>●結構良いところなのです。日本ではあまりイメージがないようですが。</li> <li>●感染症の存在。乳児(2か月未満)を同行させるリスク。</li> </ul>

図6 日本の本社・一般社会に知ってほしいこと(自由記入:原文のとおり)

前項の「日本の本社・一般社会に知ってもらいたいこと」ではビジネスの場を意識したものが多かったのに対し、当項目では普段の生活実感を聞いた設問である。環境面では気候・医療・衛生面での指摘が多かった。前報まで

には見られず今回特徴的だったのが、2016・2017年に共通して日本人に起因するストレスの記述が目立ったことである。「日本のやり方に固執し押し付けてくる日本人」「ミャンマーにいるのに日本の質を要求する」「日本

#### 環境面

##### <2016年>

- 週末やることがない。これから何をして過ごすか、ストレスをうまく発散してゆけるか不安。
- ミャンマー生活の中で雨期と乾季とではストレスが異なる。雨季ではカビの問題、外出しにくいなどあり、気分もおちるが乾季では外出できることで気分も上がる。天候によるメンタルヘルスは影響あると思われる。
- この国の発展について入口が見えない。どこから改革に手をつけていいかわからない。
- 特に大きな不満はないですが、ショッピングを楽しんだりできないのはちょっとさみしいです。
- どのような設備があり、何を治せて、何を治せないのか。
- ねずみが多く食料庫を荒らされることも、病気になるか心配。
- 虫・ねずみが出る。犬が街に多い。
- 元気でいれば住みやすい国です。ふだんの生活で特に不便な事はありませんが食生活の片寄り、運動不足が心配。
- ビール、アルコール、タバコが日本と比べて安い。〇〇？は少ないが、この点は良い。タクシー代が高い。
- 医療面の信頼性が・・・
- 日本食糧が限定的であることが不満ですが日本料理店が多いのがよいと思います。水、インフラが安定すればよいと思います。
- 婦人科クリニックなどがよくわからない（病院情報があまりオープンでない気がします）
- 気候に慣れたせいか、特に不具合を感じなくなりました。
- 想像以上に治安が良い。他人に優しい。日本人（特に若手25-30歳）が多い。ちなみに平成生まれの回は40人以上。同世代が多くいるのはストレス発散になる。

##### <2017年>

- 交通事故の多発。感染症が多い。
- 年末年始、水祭り中の医療（日本人医師不在）
- 文化面
- 対人関係に関しては日本での会社員生活に比べリラックスしています。
- セクハラ行為をここぞとばかりしまくる日本人男性が多いのがストレス。
- 日本人コミュニティの狭すぎる問題。しかし、それが合う人が生かされる。
- 生活は不便ですが、ミャンマー人の人の良さ（家族のように接してくれるところ）が大好きです。発展途上ではありますが、これからというミャンマーの活気を楽しんでおります。
- ミャンマー生活は不便といわれがちですが、日本のいなかと比べればインフラ以外は一緒です。外者がミャンマーで大きな顔していることに関して考えなおしてほしい。

#### 文化面

##### <2016年>

- ミャンマー人の英語に疲れる。タクシーをいちいち値段交渉しないといけないのが面倒。いつもぼったくられるんじゃないかと思った。
- 考え方にもよりますが、ある意味で自然が豊かで人々がおおらかですので、ストレスは日本より少ない場合があると思います。
- どうしても日本人である以上、日本人として仕事しなければならぬことにストレスを感じる。ミャンマーであるのに日本のやり方をしている日本人、又はそれを押し付けている日本人には残念に思うところがある。
- ミャンマーの発展に伴い、貧富の差が広がっていくと思います。医療を含め、今後日本（日本人）としてどのようなことに協力できるのかが知りたいです。
- ミャンマー生活はゆっくりと時が流れるのでとても気に入っています。
- 日本とは清潔感も道徳もちがいます。「こんなもんか」と一歩引くことでだいぶ楽しめるようになりました。
- 20年後には日本より経済的にも文化的にも発展した国になるだろうと考えます。
- 私のまわりのミャンマー人は、顔見知りになればニコリ笑ってくれて、時に恥づかしそうにします。感性が日本人と似ていると思います。私は30代、20代の医療職の女性と働いているからかもしれませんが、でも患者さんや家族の気持ち、言葉は通じなくともわかるような気がします。
- 日本に一時帰国して日本よりもミャンマーの方が生活しやすいと感じた。ストレスを感じる部分が日本より少ないと思う。また、ミャンマー人の人当たりの良さを感じることが多い。
- 特に、日本人の相手が大変。ミャンマーにいるのに日本の質を要求される。
- 自ら進んでこの国に来たので不満は一切ありません。確かに日本と比べると色々不自由な点はありますが、ミャンマー人はこの国で力強く生活しているので同じ人間である以上問題ではありません！
- 他のASEAN諸国に比して生活のハードさはあるが、それでも人が好きでミャンマー人のやさしさは気に入っています。仕事日はやはりムズカシイです。日本人との付き合いが面倒です。

図7 「ミャンマー生活について思うこと」自由記入欄（基本的に原文の通り。ただし〇〇の部分は原文で判読不能）

人とのつきあいが面倒」(以上 2016 年)「対人関係では日本での会社員生活に比べリラックス」「セクハラ行為をここぞとばかりしまくる日本人男性が多い」「日本人コミュニティの狭すぎる問題」「外者がミャンマーで大きな顔をしていることに関して考え直してほしい」(以上 2017 年)と、同胞に対する厳しい目が感じられた。筆者が外務省時代に勤務した実感では、邦人数が極めて少なく、かつ、生活条件の厳しい状況(スーダン:当時約 40 人, セネガル:当時約 200 人)では、邦人間では比較的まとまる状況があったが、邦人数の多い任地(北京:当時約 8000 人)では邦人間の摩擦を目にする機会も多く経験した。以上の筆者の体験は、あくまでも筆者が在勤していた“特定時点”における経験であり一般化は困難であるが、今回、継続的定点調査で 2016 年を越える時点から邦人間ストレスの表明が増加し、邦人数推移のグラフと照らし合わせてみると、邦人数が 2000 人を越えると邦人間ストレスが増えるのではと推測された。さらに引続き観察を継続してゆきたい。

一方で、ミャンマー生活に対するポジティブな感想、「ミャンマー生活はゆっくりと時が流れるので気に入っている」「『こんなものか』と一歩ひくことで楽しめるようになった」「一時帰国して日本よりミャンマーの方が生活しやすいと感じた」「ミャンマー人のやさしさに気に入っている」「ミャンマー人の人の好き(家族のように接してくれる)が大好き」も見られた。これらポジティブな感想がビジネス面では少なくともつばら生活面で見られるところに、まだ先進国的なビジネスのペースに乗り切れない現地人と、それにフラストレーションを感じる邦人間のギャップが感じられ、なお時間がかかるものと思われた。

## 今後の展開

前述の新会社法が 2018 年 10 月 1 日に施行となり、ミャンマー国内における企業活動環境の改善、また、外国人の居住に適するサービスアパートメントの整備もすすみ、投資の拡大および邦人数の増加は順調にすすむものと思われ、今後も経済発展・邦人社会規模拡大とともに環境変化を調査継続してゆく予定である。

なお、本稿執筆時点のミャンマー報道では「ロヒンギャ問題」に関するものが目立っており、このラカイン州での政治的問題がミャンマーのイメージに影をおとしている。現地の企業関係者に聞き取りを行った範囲では、この問題の影響範囲はおおむね政治的イメージに限定され、欧米企業も含めて経済進出にはほとんど影響を与えていないとのことであるが、併せて推移を見守ってゆきたい。

## 謝 辞

本調査の実施にあたり協力をいただいた現地在留邦人、医療関係者の皆様に感謝申し上げます。本研究は科学研究費助成(課題番号 15K09877)を受けたものです。

## 文 献

- 1) 勝田吉彰. ミャンマー連邦共和国における在留邦人メンタル事情. 臨床精神医学 2013; 42: 389-92.
- 2) 勝田吉彰. ミャンマー連邦共和国の精神科医療事情. ところと文化 2014; 13: 54-60.
- 3) 勝田吉彰. ミャンマー邦人社会 2014 年の現状と課題～メンタルヘルスを中心に～. 日本渡航医学会誌 2014; 8: 34-7.
- 4) 勝田吉彰. ミャンマー在留邦人を取り巻くメンタルヘルス環境～2015 年の現状～. 日本渡航医学会誌 2015; 9: 28-33.
- 5) 外務省海外在留邦人数調査統計  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22\\_000043.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html)
- 6) JETRO 海外ブリーフィングサービス  
<https://www.jetro.go.jp/services/briefing/>
- 7) ミャンマー・ジャポン 各号
- 8) 稲村 博. 日本人の海外不適応, 日本放送協会出版, 東京, 1980; p.155-60.
- 9) ありえない! 日本人駐在妻が「日本人会」で驚いたこと 11 選  
<https://tabizine.jp/2018/01/29/170812/#i-5>
- 10) 海外在住 日本人社会の狭さ 読売オンライン  
<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2013/1008/622201.htm>
- 11) 海外在住の難問～日本人コミュニティとどうかわれば良いのか?  
<https://note.mu/matsuhira/n/nad13aaf42754>

JETRO ミャンマー概況

[http://www.jetro.go.jp/world/asia/mm/basic\\_01.html](http://www.jetro.go.jp/world/asia/mm/basic_01.html)

**Stress factors and required support when expanding into the “Final Frontier” :  
report on the fourth year of a fixed-point investigation in Myanmar**

Yoshiaki KATSUDA

Kansai University of Social Welfare, 380-3, Shinden, Ako-shi, Hyogo-ken, 678-0255 Japan

**Summary** : The author is conducting a fixed-point investigation in Myanmar, which has seen marked expansion in recent years, on how the stress environment changes according to the stage of development when a location into which Japanese companies had expanded little is expressed by economic periodicals and newspapers as “the final frontier” and becomes a new target for expansion. This paper reports on the situation in 2016–2017. Myanmar’s political and economic situation has reached a plateau due in part to unfamiliarity with economic policy, following a change of power to the NLD Party led by Aung San Suu Kyi in the 2016 general elections and having attracted the spotlight from developed countries as an investment location, and the number of companies expanding into Myanmar and the number of Japanese residents have both increased. The stress factors of “transport infrastructure,” “communications infrastructure,” and “presence of infectious diseases” decreased in 2017 compared to 2016, while “medical infrastructure” and “Burmese people (locals)” account for greater proportions. As stress release methods, “Internet,” “domestic travel,” “international travel,” “drinking alcohol with others,” “drinking alcohol alone,” and “karaoke” have grown, with improvements in the communications environment and development of low-cost carrier (LCC) routes in addition to economic development thought to have contributed. It is also thought to reflect an increase in opportunities for socializing accompanying the growth in the number of Japanese citizens. Among things respondents want their head offices in Japan to know and what they think about life in Myanmar, remarks about environmental aspects were common, while emotions concerning Burmese people and harsh comments about fellow Japanese were also notable.

**Keywords** : final frontier, Japanese citizens living abroad, mental health, Myanmar, employees working abroad

(2018年10月22日受付, 2018年12月21日受理)